

環

(あい)

光緒抄	2
琥珀集	6
珊瑚集	14
瑪瑙集	26
紅玉集	27
俳詩交歓	29
5月号月評	30
惠贈句集評見(46)	32
他誌転載	34
特別作品「木曾路」	36
琥珀集作品鑑賞	38
珊瑚集作品鑑賞Ⅰ	39
Ⅱ	40
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	41
句集「うらら」共鳴句	44
岷の国父の蒼天(36)	48
環本部句会報(6)	50
エッセイ「去なすな」	52

今月の一句

翡翠やむかし一揆の死出の川 桂樟蹊子

(昭和六十年作)

三上山の東を北流する家棟川での出来事。天保十三年、この川沿いに薙旗を持った義民が野洲の代官所へ抗議に及んだとされる。承認されたものの、その一万数千人もの義民の首謀者六十余名は処刑されたと言うこの川を死出の川と詠われた。川を翔る翡翠の羽の瑠璃色が、いまはまるで義民たちの魂のように光っているのが悲しい。省略の効いた句である。

隆子

春の闇

塩路隆子

針箱にほつれ絹糸春愁

磔像の右傾の愁ひ春の闇

握手せし余韻を包む春手套

リアドロの雛つくづく当世風

時折は美声に戻り恋の猫

春一番吹かれ歩きの小猫かな

うたかたの恋を演じて春歌舞伎

五月号光耀抄

塩路 隆子選

桐箱に山梔子染の春シヨール
紐引けば春灯点りたる素直
黙禱のこの刻大地冴返る
ふたり居に淀大根のどろどろ煮
恋猫の抜き打ちに会ふ京の路地
如月は我が生れ月ひとり酌む
切貼りの淡き押し花春障子
猫舌に馴染める瀬田の蜆汁
行列で買ふ近江産春野菜
籬締めて太極拳や春の風
聖天の大き巾着春日和
邑はづれ道知辺てふ梅開花
囀を脅す一閃黒き影
残雪の包む麓の移住村
春浅し「ばってん」言葉出づる旅
湖里に賜へる春の霰かな
朧夜やとび出しさうな鹿の絵図

田下 宮子
吉田 希望
鈴木 照子
山口キミコ
中川すみ子
難波 篤直
松岡 和子
竹内 悦子
増田 一代
坂上 香菜
坂根 宏子
笠井 清佑
国包 澄子
藤本 秀機
辻 香秀
小澤 菜美
福本すみ子

春風にふくらむ暖簾しにせ菓舗
 春場所の明荷着く部屋人の群
 春場所の幟はためく相撲部屋
 老松と過す三代雛の家
 母さんにおよばずながら花衣
 まどろみをつと起さるる恋の猫
 求愛の水ぷいと掛け小白鳥
 ストーブを囲む待合余呉訛
 凍緩む朽木の出湯にあたたまり
 あふるるまで卵泡立て白魚汁
 比叡の峰昇る一筋凧の糸
 ダリの絵の飛出す時計春の雷
 ベビーカー名残の雪に阻まるる
 盆梅の歳月しのぶ幹の肌
 「東風吹かば」売家の梅に詩の札
 蛇穴を出でて瓦礫を嘆じけり
 活けられて青麦の穂や珈琲の香
 ぜんざいの善哉善哉笹子鳴く
 末吉の嬉しさ見せて初神籤
 大らかな母の終章すみれ咲き

辻 知代子
 伊藤 純子
 伊藤 和子
 宮田 香
 宮崎左智子
 笹井 康夫
 佐用 圭子
 三川美代子
 池田加寿子
 杉本 綾
 五十嵐 勉
 塩路 五郎
 土井久美子
 木戸 宏子
 北尾 章郎
 阪本 哲弘
 伊庭 玲子
 栗倉 昌子
 関根ひろみ
 前川ユキ子

ボールペン赤出し黒出し春炬燵
 釣られたる針魚の眼一途なり
 春光に旅に出でよと誘はるる
 抜群の記憶力なり木々芽吹く
 どれ程のマグマ潜むや春の鬱
 花かつを躍る鉄板春の宵
 あたたかや鳩の来てゐる軒端かな
 終の日はたんぼぼの絮飛ぶやうに
 羊水の記憶をたぐり羽根布団
 はや六十路輝け六十路春衣
 冬耕やマネキン二体横たはり
 ミシン踏む昭和の母や春障子
 やり直し出来ぬ子育て鳥雲に
 水音にひかりを込めて春の川
 笑ひ過ぎ烈火の咳につながらぬ
 雪解けて睨み効かせる鬼瓦
 島人の笑ひ声して石蓐採
 リヤ王の悲劇演ずる朧の夜
 しゃぼん玉通天閣を納めけり
 春の月夫と隣りて深夜便

岡佳代子
 山本孝夫
 谷口俊郎
 吉田宏之
 森下康子
 中村ふく子
 和田郁子
 伊藤憲子
 伊東和子
 松田和子
 常田和子
 藤見佳楠子
 井口淳子
 高谷栄一
 中本吉信
 能勢栄子
 田中浅子
 川崎利子
 田中芳夫
 寺田光香

薬草湯の温もり沁むる春の宿
 亡き母と桜宿膳懐かしみ
 白山にほとばしる水露の臺
 冷え症の啜る粕汁具たくさん
 土筆生ふ死者も生者も往きし径
 雛の灯を借りて訥々古文読む
 鳥となり春の大海渡りたし
 ひちぎりの色美しや雛の菓子
 青竹に折紙雛や能勢の里
 うしろ手に値ぶみしてゐる植木市
 湖風に身を晒しつつ蛭採る
 このあたり愛犬の墓春の土
 手になじむ亡夫のルーペや春の宵
 流さるるひひなに一穢なき岸辺
 化野の苔むす仏はだれ雪
 火の匂ひ残して雨の末黒かな
 家庭医学の書籍探しや日脚伸び
 回廊を籠と化す火やお松明
 あやとりの四段梯子縁日向
 濡れて行くと言へぬ春雨放射能

富田ヒナ江
 鷺見たえ子
 片岡久美子
 桂 敦子
 紀川 和子
 小西 和子
 小林 久子
 飯田美千子
 稲田 和子
 石川かおり
 宇治 重郎
 大島みよし
 大松 一枝
 和田森早苗
 山崎 里美
 松田 洋子
 秦 和子
 中井登喜子
 長濱 順子
 西田 史郎

琥珀集

三月

吉田 希望

出張を旅と思へり斑雪

紐引けば春灯点りたる素直

啓蟄のこむらがへりも嬉しかり

三月を響かせ降りる歩道橋

古家の跡地にもはや名草の芽

残像の中を歩める修二会帰路

姓名を書き疲れたり入学日

未来行

鈴木 照子

未来行てふ復興電車下萌ゆる（三陸鉄道）

黄水仙祈りの浜に傾ぎ咲く

黙祷のこの刻大地冴返る（三月十一日午後一時四十六分）

春雪や津波に消えし万の声

木の芽風階をダツシユのランドセル

春風が開くりカちゃんハウスの扉

美容師の握手サービズ暖かき

山梔子染

田下 宮子

冴返る伊根酒蔵の女杜氏

春雪や「伊根満開」の赤米酒

桐箱に山梔子染の春シヨール

定年の祝コンペや山笑ひ

初音せる隣家の門に在釜札

さみどりの絵の具買ひ足す木の芽どき

茹であがるパスタに花菜まぶしけり

おどろ髪

山口キミコ

池中の龍

難波 篤直

春浅しオペに流るるBGM

末黒野の若草山の際立てり

芽柳の橋姫神社おどろ髪

蕎麦掻の試食に恋ふる郷の夜

古都結ぶ木津の山里下萌ゆる

ふたり居に淀大根のとろとろ煮

判じ得ぬ文字春寒き書道展

如月は我が生れ月ひとり酌む

早春や池中の龍の雲を得む

振舞の甘酒旨し節分会

敏捷に鳩の餌奪ふ寒雀

日没の個所移りける彼岸かな

橋ほとり雪を被りし式部像

水鳥の群れ遊びけり舟溜

春を呼ぶ

中川すみ子

泥の夫婦

松岡 和子

羽衣を残し余呉湖の鳥帰る

恋猫の抜き打ちに会ふ京の路地

フロントの淑やかレディー梅活けて

ウィッグに合はせる毛染うらかな

カーテンを早めに開けて春を呼ぶ

腕痛む深き残雪掻きし後

並木路やメタセコイヤのなごり雪

早春賦奏でるごとく節分草

身の丈のしあはせ探る梅日和

豆腐屋のラッパ戻りて映に春

冴返る「心の風邪」といふやまひ

春の雪妣愛用の姫鏡台

切貼りの淡き押し花春障子

田を返す泥の夫婦の笑ひ合ひ

魷場

竹内 悦子

草萌ゆる

坂上 香菜

夕東風や灯のぼつぼつとホテル窓

猫舌に馴染める瀬田の蜆汁

敦煌行きの旅の果せず霏れる

潮流に育ち磯の香新若布

ブルーギル釣りて嘆くや水温み

雛の日や婚を決意の末娘

陸く近く光集めし魷場かな

春野菜

増田 一代

茶屋のぜんざい

坂根 宏子

行列で買ふ近江産春野菜

草餅の香なつかし幼き日

近江路を傘寿の夫とおぼる月

にこにこと母のおつむのうららかな

春色に変わりゆく日々ウオーキング

春の日のけふはどこまで近江地図

身回りの老前整理春うらら

縮めて太極拳や春の風

遊園地を飛び出し破裂しやぼん玉

ガラスアートの目鼻無き雛蒔絵柄(黒木国昭展)

地下鉄に踏切の音地虫出づ(御堂筋)

春愁や浅井長政自刃の地(小谷城)

江うの生れし大広間跡草萌ゆる

白梅や小谷城おだにを攻めし追手道(清水谷)

ロケットの様にアンテナ春の空

すれ違ふ人の靴みな春の泥

宝山寺の崖の弥勒や芽吹どき

聖天の大き巾着春日和

石畳いそひらの暗峠くらがり木の芽風

ケープルに沿ひたる道や草萌ゆる

期待せし茶屋のぜんざい春日差

春キャベツ

笠井

清佑

雪解水

藤本

秀機

春めくやトーストパンにカシスジャム

邑はづれ道^{みち}知^{しる}迎^{むか}へてふ梅開花

スーパ-の開店目玉春キャベツ

芍薬の芽を労はりつ肥料置く

梵鐘を撫でてゆくなり涅槃西風

水取や僧はほむらの磴昇り

水取やしはぶき押へ局部屋

桃の花

国包

澄子

恋の春

辻

香秀

覚めやらぬ体内時計春の暁

囀を脅す一閃黒き影

桃の花挿して六帖華やぎぬ

水温む餌付の鯉の序列かな

ふらここの鎖の軋み空を蹴る

診る人も診らるる人も春の風邪

厩より神馬たてがみ春の風

傑僧のピカソぶりの書春寒し

残雪の包む麓の移住村

おじぎする工事看板春の泥

春北風や過疎となりたる杣の村

つし裏に眠りてゐしと雛一对

若僧の浄土一卷春法事

有限の地球資源や雪解水

廻廊はデートスポット恋の春

春らしき日差を享けて旅仕度

朝寝して窓を開ければ風そよと

春セーター胸に形見のダイヤ揺れ

春の夜の独り暮しの気楽さよ

春浅し「ぼってん」言葉出づる旅

パンジーの人ウオッチング街角に

瑠璃集

北斎画

北尾 章郎

ホテル泊欠けたる物に置炬燵
妻に受くるチヨコに寧らぎ春の風
侘助を齡の順の上座にて
「東風吹かば」 売家の梅に詩の札
春愁や津波恐怖の北斎画

冴返る

阪本 哲弘

あの「鬼」と呼ばれし上司豆を撒く
冴返る小道具担ぐ舞台裏
蛇穴を出でて瓦礫を嘆じけり
平均の寿命をクリア山笑ふ
段畑に耕人の声雲間より

青麦の穂

伊庭 玲子

枝毎に落とす雫や残り雪
春雨ににじむ稜線東山
笑ひ初むる山に陽射しの柔らかき
立雛の額に玄関華やげり
活けられし青麦の穂や珈琲の香

ぜんざい

粟倉 昌子

ぜんざいの善哉よきかな善哉よきかな笹子鳴く（一休寺五句）
坐禅組み警策体験冬ミうらら
心経を訥々唱和春隣
福耳の一休像や春近き
そこはかと動き始めし二月かな

初日記

関根ひろみ

初景色見慣れし町の清々し
未吉の嬉しさ見せて初神籤
真つ新のページに未来初日記
風あらば枝よりはらり雪軽き
伸びゆける力の苦味露の臺

五月号月評

塩路 隆子

毎月の月評は琥珀集から選んでいるが、今月は瑠璃集からの月評をさせていただく。NHKなど、五句を投句している人達に焦点をあてようと思う。

活けられて青麦の穂や珈琲の香

伊庭 玲子

珈琲店に活けられた青麦を詠まれた。最近では麦を作っている田は少なくなつたが、滋賀県などでは時々見かける。黄金色に捻つた麦畑の香は丹波生まれには懐かしい。「青麦」「麦青き」の季語には若々しさや育ちゆく麦の力、勢いを感じる季語としてもよく使われている。コーヒー好きで円満なお人柄の作者は、お友達も多い。流れる音楽を聞きながら活けてある青麦の穂を眺め、田園風景を味わいながら飲むコーヒーの味は如何だったか。満面に笑みを浮かべながら「美味しかったですー」の返事が即座に返ってくる筈である。

ぜんざいの善哉善哉笹子鳴く

粟倉 昌子

よく旅行をされるご夫婦である。俳諧味の効いた句として取り上げた。一休寺にお参りされたときに振舞われ

たぜんざいが殊の外美味しかったようである。それを受けて「善哉善哉（よきかなよきかな）」と重ねて詠み込まれた。少し技巧が見え過ぎのところが面白い発想の句である。禅僧にでもなつた気持ちをお味わわせてくれたぜんざいに「笹子鳴く」のリズムが心地よい。

末吉の嬉しさ見せて初神籤

関根ひろみ

「末吉」とは後に吉となる運勢を言う。お正月におみくじを引かれた作者には、そんな悩みは全く無きそうであるが、今よりさらに良くなる運勢など結構な話である。作者は嬉しさのあまり人に見せられたのであろう。「嬉しさ見せて」の表現が作者の喜びを大きくしており喜びが伝わる句に仕上がっている。

大らかな母の終章すみれ咲き

前川ユキ子

九十三歳のご自分のお母様のお世話をしておられる。お洒落な頭のいいお母様と聞き及んでいる。「終章」と捉えられるようになったのはごく最近の事で、それまではお元気で何事もご自分で判断されご自分で動かれていたようである。「大らかな」の措辞にすべてを神に任せた安心立命の境地に立たれたお母様を想像出来る。どうかお母様も介護をされる作者にも頑張っていただいたと思うばかりである。

(以下略)